

LEARN WITH ソフトバンク ～魔法のプロジェクト～ インクルーシブ教育 実践事例

事例の活用について

※本事例の知的財産は投稿者に留保されます、使用される際には出典として
「LEARN WITH ソフトバンク ～魔法のプロジェクト 組織名」を記載ください。

■基本情報

組織名： 辰野町立辰野西小学校

所在地： 長野県上伊那郡辰野町
※都道府県・市区町村

氏名： 福島 徹

投稿月日： 2025年 10月 1日

■インクルーシブ対応を検討するきっかけとなった児童・生徒（※以下「対象の子ども」と略）について

対象の子どもの学齢 小3 8歳

例：小6 12歳

障害種別：

- 知的障がい、知的障がいを伴う ASD
 高機能自閉、アスペルガー症候群 読み書き障がい
 注意欠損多動性障がい (AD/HD) 肢体不自由
 聴覚障がい 構音障がい 視覚障がい 病弱
 重度重複障がい その他 ()

主訴 (主な困り)

- 読む 書く 聞く 見る 話す 記憶する 移動する
 その他 ()

その他補足

話を聞いたり読んだりして理解することの困難さは見られないが、書き写したり文章を書いたりすることに大きな困難さがみられる。書字では、時間がかかるだけでなく、文字の形がとれないため、書いた文字が読みにくくなってしまふ。書き写しでは、行を飛ばしたり同じところを繰り返し書いてしまったりすることもある。

■インクルーシブ対応状況について

1 インクルーシブ対応の検討の 児童生徒は、どの範囲まで利用が可能ですか？

教科	<input type="checkbox"/> 全ての教科で使用可能 <input checked="" type="checkbox"/> 特定の教科のみ使用可能
場所	<input checked="" type="checkbox"/> 通級等のみ <input checked="" type="checkbox"/> クラス限定 <input type="checkbox"/> 学年限定 <input type="checkbox"/> 学校全体
利用シーン	<input checked="" type="checkbox"/> 宿題 <input checked="" type="checkbox"/> 授業中 <input type="checkbox"/> 小テスト <input type="checkbox"/> 定期テスト <input checked="" type="checkbox"/> その他（作文）

2 周囲の児童生徒が ICT を使用するにあたり、個別の許可が必要ですか？

はい いいえ

■インクルーシブ対応に向けての工夫について

①前問で、「いいえ」と回答された方にお伺いします。環境整備に向けた実施事項/工夫点について記載ください

実施事項/工夫点

クラス担任や保護者は子どもの困難さに対して理解があり、代替手段を取り入れることに前向きであったため、通級による指導では、手書き以外の選択肢を増やすためにキー入力の練習も行っています。

書き以外では、自分の考えや思いを自ら積極的に話したり言葉で伝えたりすることの苦手さも感じられるため、表出する事柄をまとめたり、整理したりするためにマインドマップや AI を積極的に活用し、自分の苦手さを有効に補える手段も取り入れています。

様々な手段を知り、苦手な作文では積極的に ICT を利用しようとする自発的な動きが出てきました。

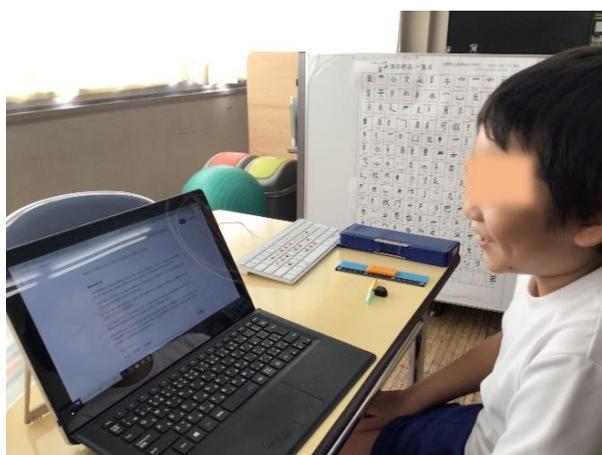
■その他

参考になる写真があれば、こちらに添付してください。

※個人の写真が含まれる場合、事前に保護者の許可が得られているものに限りませう。

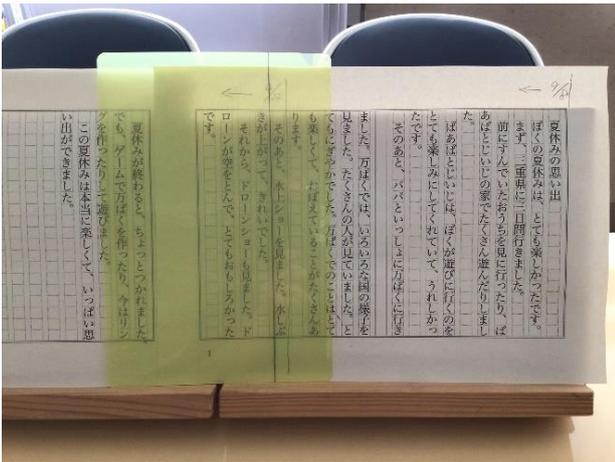


夏休みに関連するワードでキー入力の練習

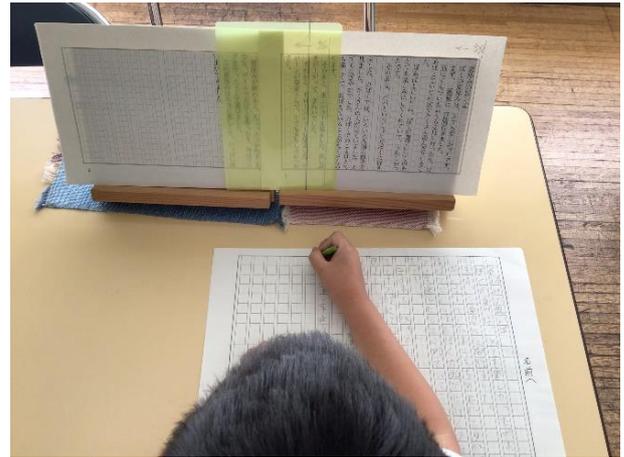


ChatGPT に作文が出てくる様子を見て笑顔になる

■変化や効果について



行跳ばししないよう、リーディングガイドを使用



「自分で書きたい」と原稿用紙を見ながら書き写し



冬休みにクリスマスケーキを手作りしたことを 大画面にマインドマップを映し、画面共有しながらやり取りしています

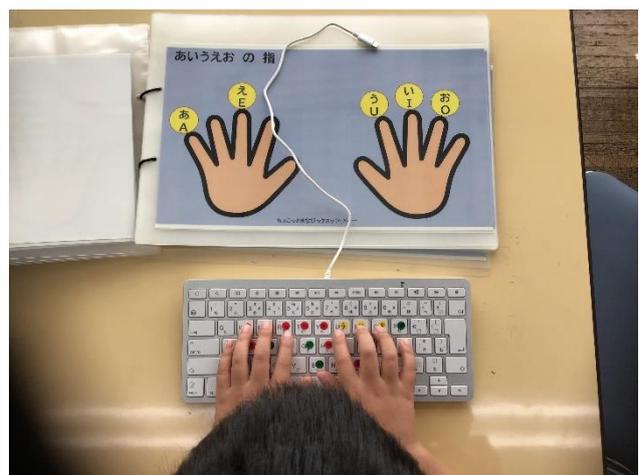
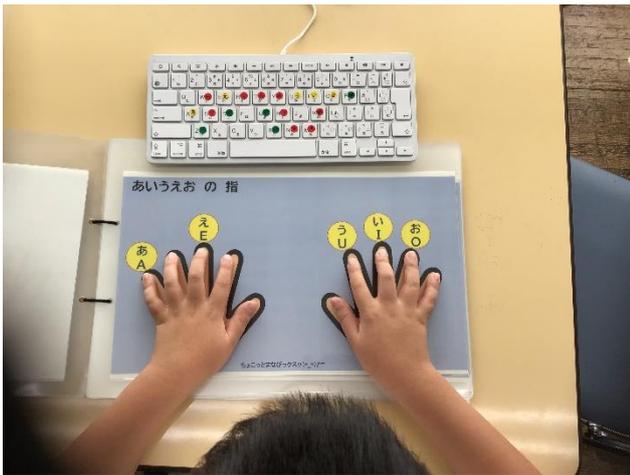
作文の苦手意識は高いものの、思いのまま話し SimpleMind へ入力していきました。入力された事柄を一緒に話しながら整理していくと、関連する事柄が次々と頭に浮かび、マップの中身が充実していきました。まとまったマップを一つ一つ読み上げていくと嬉しそうになぞく様子が見られました。

そのマップを ChatGPT に貼り付け作文にすると、その様子を笑顔で見えていました。その後、出来上がった作文を読みながら自分の思いと違う言葉や表現を一緒に話しながら修正し、出来上がった文章は縦式アプリで原稿用紙に貼り付けて作文を完成させました。

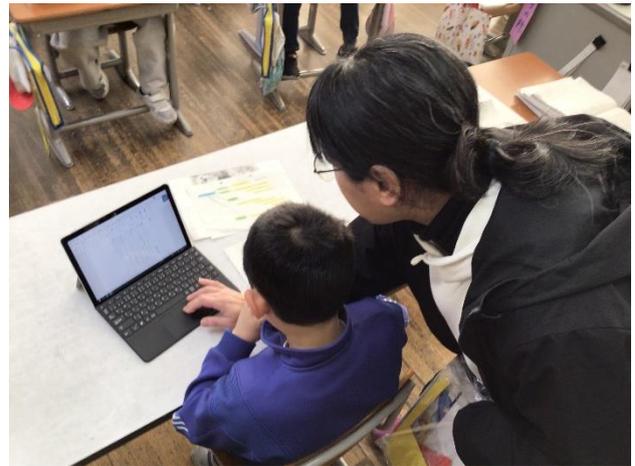
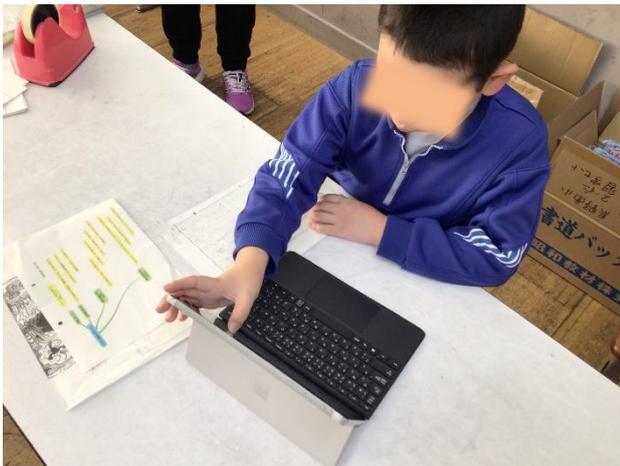
「この作文、どうする？ このまま〇〇先生（担任の先生）に見せる？」と声をかけると「書きたい（書き写す）」と一言伝えてくれました。

ICT を活用し作文を作り上げていく過程の中で「書きたい」という思いを高めることに繋がり『作文を書きたい』と思える気持ちがこの子の中に芽生えたことに喜びを感じています。また「作文を書く」ことの負担が軽減されたことで、**本当は自分の手で作文が書きたかったんだ。**という真の願いに気付くことができました。

① 対象の子どもにどのような変化がありましたか



手作りの指配置シートを使ってたところ、自分から指とキーの位置を確かめながらキー入力の練習にも取り組んでいます



通級での様子を知った担任が、所属学級でもタブレットを取り入れて国語のお話作りに取り組んでくれています

作文の完成を何よりも楽しみにしていたのが、おうちの方でした。

おうちの方に見せたいと本人も張り切って最後まで書き、仕上げることができました。

構成の部分では、ICTだけでなく、AIも活用して作文を仕上げるやり方の良さに、担任と・保護者が共に理解していただくことができ、日常の作文や日記の中でも生かしたいと保護者からの声が寄せられました。

学級担任には、通級教室で行っている作文作成までの様子を伝えたり手順を説明したりしたところ、「それ、クラスでもやってみたい」との反応があり、作文や国語の単元『たから島のぼうけん』での物語づくりで取り入れてくれました。作文の骨格をAIで作成し、出来上がった文章をもとにやり取りしていると「頭の中にちゃんとストーリーがあって、こんなにもいろいろ考えていたんですね。」と今まで気づけなかった本人の良さを発見できたことに驚きと喜びを感じ、その様子を嬉しそうに話してくれました。

「自分で書きたい」との思いがある子なので、出来上がった物語は、タブレットの画面を見ながら書き写して完成となりました。